

訳者からのメッセージ

この本の原題である『Rules of Thumb』とは、「理論ではなく経験に基づいた法則」といった意味の慣用語です。著者であるアラン・ウェバー、そして、伝説的なビジネス誌「ファスト・カンパニー」の名前を知る人は日本では多くないかもしれませんが、少しいただき、この雑誌・著者についてお話しさせていただきます。

「ファスト・カンパニー」は一九九五年、「ハーバード・ビジネス・レビュー」のマネージング・エディターだった著者が同僚と共に創刊した雑誌です。著者は「ファスト・カンパニーは雑誌ではなく、ムーブメントであり、新しいビジネスのためのハンドブックにしたい」と宣言しました。創刊号の表紙には「仕事はより個人的に、コンピューティングはよりソーシャルに、知識はより力をもつようになった。今こそ、ルールを壊せ」という言葉があります。これは、今でも通用するメッセージでしょう。

「ファスト・カンパニー」は創刊三年目でアメリカの雑誌の最高権威である「最優秀雑誌賞」を受賞、九〇年代後半のドットコム・バブル時には先鋭的で新しい働き方を志向するビジネス

プロフェッショナルの間で高い評価を得て、読者は地域ごとにオンライン、オフラインのネットワークを構築し、一時は世界中に三万人を超える読者コミュニティが構築されました。

ベストセラー書籍『ビジョナリー・カンパニー2―飛躍の法則』（日経BP社）、『フリーエージェントの社会の到来』（ダイヤモンド社）、『ブランド人になれ！』（阪急コミュニケーションズ）等はすべて「ファスト・カンパニー」の巻頭特集記事がもとになっています。

アラン・ウェバーは「ファスト・カンパニー」をゼロから創り上げた起業家であると同時に、賢明で、ユーモアにあふれ、複雑なことをわかりやすい言葉で紡ぐ才能を持った一流の「プロ編集者」でした。自信に溢れながらも、謙虚さと学ぶ姿勢を忘れない人でもあります。本書の最後にあるルールは、「至る所に学ぶべき先生が溢れている」というものですが、ウェバーこそ、そのルールの実践者でした。そんな彼の人物があつたからこそ、本書に登場するような世界のトップレベルの人物と魂の通った交流をすることができたのです。

■なぜ今、『魂を売らずに成功する』ことが大切か？

この本が生まれたきっかけは、こんな出来事からでした。

著者がある研修でスピーチをした際、その会社のトップが「現代における、モラルを備えた成功のロールモデルは誰でしょう？」と尋ねたのです。しかし、著者を含めた誰もがそれに答えられなかったそうです。著者はこのことから、今までの成功のための法則やパラダイムが変

わりつつあり、新たな「経験則」をまとめる必要がある、と感じました。

今までの成功法則が通用しない時代にロールモデルと成り得るリーダーとはどんな人か、また自分を偽らず、やりたいことをやり、かつきちんとした報酬を得られる、「魂を売らない成功」とはどんなものか。

著者が好んで使うフレーズの一つに「今はゲームのルールが変わりつつある。新しいルールでプレーしなければならぬ」というものがあります。卓越した編集者としての見識・洞察をもってまとめられた本書は、世界金融危機直後の米国で学生からビジネスパーソン、起業家、非営利団体で働く人など幅広い層から高い評価を得ました。「あらゆるルールが変わりつつある」という状況は日本でも同様であり、この本の五十二のルールは広く普遍性をもつと感じています。

■日本語版出版にあたって

今回の日本語版出版は、著者が私の元に出版前の原著のゲラ原稿を送ってきたことから始まりました。私はかつて大学生の頃、来日中の著者の講演会に参加する機会があり、その後偶然にも著者と同じアマースト大学に留学しました。米国で著者を訪ね、創刊直後の「ファスト・カンパニー」を目にしたのです。大学卒業後、NGO団体に就職したものの、キャリアの限界を感じていた際に、改めて「ファスト・カンパニー」と出会いました。そこに描かれていた「新

しいスタイルのビジネス」(収益を上げつつ、社会・地域・コミュニティのためにもなる事業)のあり方に魅了され、以来、今日まで雑誌を愛読しつつ、著者から学び続けています。著者と知り合ったのはもう十六年も前のことですが、複雑なことをわかりやすい言葉で説明する彼のプレゼンテーションは頭の中に焼き付いています。今回の日本語版出版を通じ、私が彼から学んだことを多くの人に伝えることができれば、これに勝る喜びはありません。

本の中に、著者が雑誌を創刊した際に「『成功』をどう定義するかについて考えた」という一節があります。著者が出した結論は「インパクト」でした。雑誌の内容によって、何らかの価値が生まれ、人々の議論のきっかけとなれば成功だ、そう定義したのです。

これは、この本のメッセージでもあります。五十二のルールを読んだあとには、ぜひ皆さん一人ひとりのビジネスにおける経験則を共有してください。

これからの日本において、「本当にやりたいことを、楽しみながら、自分らしくする」。そのためには何が必要なのか。そうした議論のきっかけになれば、この本も「成功」したと言えるでしょう。

二〇一〇年 二月 市川裕康